

ほしいところ。

今朝やつと花を開きし思ひ草細き煙も立ちのぼりけり

松田英美

「思ひ草」はナンバンギセルのこと。夏に赤紫の小さな花を咲かす。この草は、薄や稻の根に寄生する。わが家の庭でも、一時、ススキの根に育てていたが、二、三年で消滅してしまった。

ここは、他の作から、山に自生しているそれと分かる。煙も山から見えたということだろう。何かこう、ほっとしたような、ほのぼとの嬉しいような気分が読める。

壇上の美人先生の体操に見とれておりぬよき運動

佐久間得幸

結句「よき運動会」が、ストレートで、無邪氣で、ユーモラスな味を出している。自分の子供の運動会らしい。

白き羽連ね一隊また一隊渡りゆく時空は波打つ

佐々木寛子

白鳥の渡り、らしい。じつさいに見ているのだろうか。そうではないような感じである。私は見ていないが、テレビで、アルプスを越える白鳥の群れの映像を放映したらしい。それに取材したらしい。結句の表現に注目して、選んでおいた。

芯冷えて体の中は風ばかり余命を尋きしことを悔いおり
片山紫

一連中の最初の一首に「癌の告知を受けいる眞昼」と

ある。それから、しばらく時間が経つての一首かと思われる。下旬のストレートな心情吐露が重くひびく。読者がおもわず居住まいを正す重さである。

竦みつつ見放くる秋の関東平野水治むるは人にはあらず

松本ちゑこ

東京歌会の吟行会でのスカイ・ツリーカラの展望をうたつた作らしい。作者の見たものが独特で、工夫が見えれる。見はるかず関東平野の何本かの川が、人の手には負えないような、自在奔放な、おのづからなる軌跡を描いていると見たのである。作者の発見である。スケールの大きな発見である。

まだそこに少年われの汲み上げし水の匂いのあるような井戸

梶尾利徳

今は使用されていない古井戸である。久々に訪れた故郷だろうか。今はもう水が枯れてしまっているだろう。「水の匂いのあるような」が、そんなあれこれを読者に想像される工夫された表現。

新温泉町となりたるその後も「はまさか」と言ふ音のあかるさ

大口玲子

先月号の森祐希子作と同じく、兵庫県の浜坂町が合併して新温泉町となつた波紋をうたつてゐる。神戸の全国大会あと、希望者が、浜坂にある私の歌碑を訪ねてくれたのである。その折の作。この一首、地名の発音に焦点を絞つてこの作者らしさを出している。